

目次

1. はじめに
2. 海外ボランティアの実際
 - (i) NPO 法人 ACTION
 - (ii) NPO 法人 CFF
 - (iii) 青年海外協力隊
3. 帰国後の活動
4. NPO/NGO が海外ボランティアを派遣する意義
5. おわりに

1. はじめに

人は何を求めて海外にボランティアをしに行くのだろうか。長期休暇で時間をもてあまし、海外ボランティアに参加した経験を持つ大学生は私の周りに多い。そして私自身もこれまで三度にわたり、フィリピンとマレーシアで海外ボランティアというものに参加してきた。主に日本の NPO/NGO などによって企画される「海外ボランティア」は数多く存在しており、いまや誰でも気軽に「発展途上国体験」ができる時代になった。フィリピンなど比較的距離の近い国での貧困問題はもはや遠い世界の話ではなくなり、ある種の「ブーム」とさえ呼べるほど、海外ボランティアというものの敷居は低くなっているように感じる。しかし、わずか一週間や一カ月のキャンプに参加したところでそれを「国際協力」と呼ぶことはできるのだろうか。そもそもなぜ時間と金をかけて海外にまで行かなければならないのか。わざわざ異国の地へ行って、普段の自分の生活からはかけ離れた異文化と出会うのは何のためで、そこからキャンプ参加者たちは何を日本に持ち帰ってくるのか。海外ボランティアというものの気軽さは、貧困や平和といった大きくて本来は身軽に扱うことのできないようなテーマを身近に簡単に引き寄せるための道具となり下がってはいないだろうか。数日間あるいは数週間の海外体験が参加者の自己満足で終わってはいないか、誰かの「語り」に色や重みを付けるための海外ボランティアになってしまっているのではないかというのが私の主な問題意識である。海外ボランティアというものはまさにこの「問題意識」を手っ取り早く身に付けてくれ、そして「知って、行動を起こしている自分」を生み出してくれる。けれど「知る」という行為にはそこから何かを変えていく責任が生じるし、その責任を負う覚悟がないままに闇雲に何もかもを知ろうとすべきでもない。安易な問題意識や途上国体験を提供してしまう海外ボランティアの側にも課題があると言えるかもしれない。

海外でボランティアに参加するために高いお金を払うのなら、その金を寄付してもっと直接的に役立てた方がいいのではないかと言われたことがある。専門知識も高度な技術も持たない素人が右も左も分からぬ異国の地でボランティアに参加したところで効率は良くないし、何の意味があるのかと聞かれることもある。しかし海外ボランティアというものはボランティアそのものが目的なのではなく、あくまで次の何かへとつながる「きっかけ」の場であると私は考える。数週間のボランティア体験はそれぞれのもので完結しているのではなく、その先に自分がその体験をどう繋げていくか、自分がその数週間の間にどう変わったかということが大事なのだと。けれどそう思う一方で、これだけ数多くの人間が海外ボランティアというものに参加しているながら、では世界が平和に向かっているのかというと素直にうなずくことのできない自分がある。「きっかけ」を手にした人びとが働きかけても世界が変わらないのであれば、海外ボランティアに意義などあるのか。本論文では海外ボランティアの意義を探ると同時に、参加者の自己満足で終わらないような、海外ボランティアの理想的な在り方ということについても考えていきたい。また海外ボランティアを主催する NPO/NGO は参加者に対してどんな意図を持っているのか、その活動内容やこれからの課題についても考える。そのための具体的な手法として、まず自分が関わったことのある二つの NPO 団体、NPO 法人 ACTION と NPO 法人 CFF について理解を深めると同時に、日本最大の海外ボランティア派遣団体といっても過言ではないであろう国際協力機構 (JICA) の青年海外協力隊についても考察する。海外ボランティアが現在ブームという形容を超えた活動になっているのであれば、そのエネルギーをさらに大きな動きにつなげていくこともできるはずである。そしてそこから世界を少しずつ変えていく希望も見いだせるのではないだろうかとは私は考える。

2. 海外ボランティアの実際

内海成治はまず国際ボランティアについて、「国際協力とボランティアという二つの側面を持った活動」という定義をしている¹。また①何かに強制されておらずボランティアの意思が最終的に優先されているという「自発性」、②経済的な対価を主な目的としない「非営利性」、③他者や社会にとって役立つ「公共性」の三つがボランティアの必要条件として挙げられている²。海外ボランティア（あるいは国際ボランティア）とは最も単純に言ってしまうと字義どおり、国外で行なわれるボランティア活動のことであるが、ボランティア活動の持つ社会性や相互性という性格上、その活動が国際協力に直結することは避けられない。国際協力については、「現代の日本が担わねばならない現実的課題」として、日本

¹ 内海成治「まえがき」内海成治・中村安秀編著『国際ボランティア論——世界の人々と出会い、学ぶ』ナカニシヤ出版、2011年 p.i

² 内海成治「ボランティア論から見た国際ボランティア」内海・中村編著前掲書 p.5

にとつての国際社会における責務という重みを与えながらも、破壊と混乱、悲しみの絶えない世界において人類の理想を実現するための努力と述べている³。国際協力のアクターは二国間援助機関だけではなく、各 NPO/NGO 団体や国際機関など多岐にわたる。経済協力開発機構(OECD)の開発援助委員会は1996年5月に貧困、教育、保健、環境の四領域にわたつて開発協力を通じた貢献の目標を掲げたが、国連も貧困撲滅、教育の普及、ジェンダーの平等化、持続可能な環境づくりなどを中心としたミレニアム開発目標を設定した。人々の生活に根ざした課題には総合的なアプローチが必要とされ、さまざまな要因が絡み合う場合には多様なアクターの連携も必要となってくる。

国際ボランティアによつて、大学の学部あるいは大学院で勉強するような「学び」を得られることに着目したのは池田光穂である。池田は自身の青年海外協力隊での経験から、フィールドでの理解には「浅い解釈」と「深い解釈」の二つがあり、国際ボランティアの役割は現地社会に即したローカルなシステムを構築するための「深い解釈」をすることであると⁴。この「深い解釈」こそが、実際に自分の足で現場に出てみなければ得られないものであり、机から離れて行われるフィールドワークの意義でもある。本や映像で得られる、一方的に与えられる情報をただ受け身的に解釈するのではなく、自分の足で集めた素材から自分なりの解釈を生み出すこと求めて海外へと飛び出す人も多いのではないかと私は推測している。海外ボランティアに参加することによつて得られる学びは個人の中で終わるものではない。ほとんどの海外ボランティア参加者はその後自国に帰るのであり、海外ボランティアに参加する人が増えつつある現状では彼らが帰国後に自国に与える影響力もまた大きい。そのような効果を池田は「草の根のブーメラン効果⁵」と呼んでいる。海外ボランティアに参加する人の大部分は何らかの活動団体を仲介しているだろうから、同じ団体の中での横のつながりや、団体間の交流も芽生える。海外ボランティアなどの現場に出て行けば、少なからず人と出会う。そこで新しい価値観を得、新しい視野を得る。世界や自分自身の姿がこれまでとは少し違って見えること。これこそが、海外ボランティアに参加する最大の意義なのではないかと私は考える。

続いて、海外ボランティアというものの中身をもつと具体的に見ていくため、私がかつて参加したプログラムを主催していた二つの NPO 法人について取り上げる。また、小さな規模で草の根の活動を行う NPO/NGO 団体との比較のため、国際協力機構が行なっている青年海外協力隊事業についても紹介する。

(i) NPO 法人 ACTION

NPO 法人 ACTION とは、こども達が本来持っている可能性を發揮できる社会の実現、こど

³ 内海成治「国際協力とは何か」内海成治編『国際協力論を学ぶ人のために』世界思想社、2005年 p.22

⁴ 池田光穂「国際ボランティアと学び」内海・中村編著前掲書 p.33

⁵ 同上、p.37

も達が自力で夢に向かってチャレンジできる環境づくりをめざして活動している日本の NGO である。1995 年に横田宗が設立し、現在は日本事務所とフィリピン国内 3 か所の事務所を抱えている。フィリピンでの児童養護施設や盲聾学校の運営・ストリートチルドレン支援事業や青少年育成、女性の所得向上事業を行うほか、日本国内でもチャリティショップの運営やボランティア派遣事業、各地での講演会なども行っている。

ACTION が主催している海外ボランティアには大きく分けて三つの形がある。スタディツアー、孤児院ワークキャンプ、ストリートエデュケーションキャンプである。スタディツアーは 4 日～8 日間と短い期間で実施され、ACTION が直接支援を行っている孤児院や盲聾学校の訪問、ストリートチルドレンとの交流や現地の一般家庭へのホームステイなどがプログラムに含まれている。孤児院ワークキャンプでは 2 週間～3 週間、ACTION が支援・運営する孤児院のゲストハウスに滞在し、孤児院の子どもたちと交流しながら併設する小学校の校舎増築や農作業などを行い、ホームステイや日帰りスタディツアーも体験する。そしてストリートエデュケーションキャンプでは、やはり ACTION が支援する盲聾学校に滞在しながら現地 NGO と協働で地域のストリートチルドレン向けのエデュケーション・プログラムに参加する。これらのキャンプやツアーは年に 7、8 回行われ、これまで学生を中心に過去 17 年間で約 2500 名が参加した。キャンプの前には参加者の不安を解消し、プログラムの内容をより充実したものにさせる事前研修が行われ、帰国後も参加者をフォローするための事後研修が実施され、その後の活動へとつなげる糸口も与えている。

私はこの ACTION が主催するスタディツアーに 2009 年 8 月に参加したことがきっかけで、国際協力というものに深い関心を抱くようになった。そもそもスタディツアーとは何か。スタディツアーとは、NGO などが活動している現場を訪ねて回るツアーのことであり、一般的な観光旅行とは一線を画している。NGO が支援している現場を訪ねるということで必然的に社会問題を一気に目の当たりにすることになる。短い期間で様々な現場を回るスタディツアーの目的は、いわば「問題意識の種まき」であろうと私は考える。対して、ワークキャンプとは何か。問題意識を呼び起こし、考えるきっかけを与えるスタディツアーと違ってワークキャンプはまずボランティアワークそのものが目的となる。NGO が活動する現地に滞在し、その支援の一端を担うことがワークキャンプであり、より直接的に現地社会や地域の人びとに対する貢献を実感することができる。

ACTION がこのようにツアーやキャンプを主催し現地へボランティアを派遣している目的は、その活動の理解者を増やすためである。社会問題を解決するためには、まず多くの人にその問題を知ってもらい、関心をもって目を向けてもらうことが必要となる。多くの人に現地を訪れてもらうことで現地の問題をより身近なものに感じさせる、参加者から周囲の人へと理解の輪をつなげていくことで問題解決への道を歩む、そのことを ACTION はキャンプやツアーの主催を通して目指しているのだという。また実際に行われるボランティアワークによって直接社会貢献を行えるほか、参加費の一部を活動資金とすることで募金と同じ役割を持たせてもいる。そしてそれらに加えて重要なことは、現地の人びとに支援し

ている人たちの存在を知ってもらうことだという。日本からキャンプやツアーの参加者たちが現地を訪れることで、現地にくらす人びとは自分たちに差し伸べられる手があること、実際に支援を行っている人びとがいるということを実感することができ、大きな支えになっている。日本人参加者たちと現地の人びとが交流することで互いに学びを得る機会となり、いろいろな人と交わることで社会や物事に対する視野が変わっていくことも、ツアーやキャンプを行う上で避けられない効果である。

ACTION ではフィリピンにおける支援事業だけでなく、「地域に根付く NGO」として国内でも様々な活動を行っている。武蔵境に構える事務所はその大半がチャリティショップとなっており、フィリピンなど東南アジアをはじめとする各国の雑貨を取り扱い、その売上げを支援費用にあてている。キャンプ参加者はこのチャリティショップの運営スタッフや事務局スタッフとしてボランティアの受け皿が用意されており、その他にも中学校でボランティア体験を語り交流する機会が設けられていたり、国内で行われる多様なボランティアを紹介したりと、帰国後の参加者がフィリピンでの体験を次につなげる道はいくつも準備されている。実際私も 2 年前のツアー帰国後は事務局ボランティアとして不定期に事務所に顔を出し、また各種のイベントにも積極的に参加し、ACTION と繋がり続けることによって国際協力活動に少しずつでも関与し続けている実感を抱いている。

(ii) NPO 法人 CFF

NPO 法人 CFF とは、世界の子どもたちの支援と青少年育成に取り組む団体である。現在はフィリピンとマレーシアで活動を行っており、児童養護施設「子どもの家」を建設・運営し、日本と海外の青年たちの協働を通じた青少年育成を行っている。1996 年に二子石章が CFF ジャパンを発足して以来、より豊かな未来のための基盤をつくることを目的に海外ボランティアの派遣やフェアトレード事業などを国内外で行っている。

CFF ではフィリピンとマレーシアの二カ国において、それぞれスタディツアーとワークキャンプを行っている。スタディツアーでは 8 日間程度で様々な社会問題の現場を訪問し、ワークキャンプではストリートチルドレンを受け入れる児童養護施設「子どもの家」の建設作業をおよそ二週間にわたって行う。これまで 13 年にわたって 2000 人以上がキャンプに参加し、フィリピンの子どもの家では現在 16 名の子どもが生活している。また 2007 年に活動を始めたマレーシアでも、4 年後の 2011 年 11 月に 5 名の子どもが子どもの家に入所した。

CFF では「子どもたちの支援」と「青少年の育成」を両輪に据えており、養護施設の建設・運営を通して貧困などを理由に家族と暮らせない子どもたちの成長と自立を支えると同時に、その活動を通して海外ボランティアに参加する青年たちの育成にも取り組んでいる。CFF では活動に参加する青年たちを次代の担い手として、「さまざまな人々との出会いと交流をきっかけに、自分のあり方・生き方を考え、互いを尊重し、可能性を高め合い、自分の目標に向かい自立し、共通の問題の解決のために協働するよう」育てることを活動の柱

にしている⁶。そのため主催するワークキャンプやスタディツアーの前後に事前・事後研修を行うだけでなく、「CFF よりみち大学」と称するセミナーを不定期で開いている。「よりみち大学」は月に一、二回程度の頻度で開かれ、ゲストスピーカーによる講演が行われる。

日本国内では各種の国内活動チームが過去参加者たちによって結成されており、その活動は多岐にわたる。フリーマーケットなどに出店して寄付金や奨学金を集める部門、現地の NPO/NGO から買い取った商品をイベントなどで販売しフェアトレードを行う部門、バスケットボールや野球などスポーツを通して国際協力を行う部門や各地方で活動するローカル部門など、幅広い部門は学生を中心とした青年たちの手により自主的に企画・運営されている。日本国内にある事務局でも随時ボランティアを受け付けており、先に見た ACTION 同様帰国後の参加者には多様な活動の糸口が与えられている。事務局でのボランティアも、実際に来局して行なう短期的あるいは長期的な事務作業のほか、大学やセミナーなどでの広報活動や、自宅でもできる作業など多様なニーズに合わせた形が用意されている。

(iii) 青年海外協力隊

青年海外協力隊とは、日本政府の ODA（政府開発援助）予算によって独立行政法人国際協力機構（JICA）が実施するボランティア事業である。一般的に日本人が「海外ボランティア」と聞いて想像するのが、この JICA が行なっている青年海外協力隊事業であるように思う。満 20 歳から満 39 歳までの日本国籍を有するものが応募資格を持ち、合格した隊員は発展途上国に原則二年間派遣される。満 40 歳から満 69 歳に対してはシニア海外ボランティアや短期ボランティアといったプログラムも用意されている。青年海外協力隊は 1965 年に創設されて以来 88 ヶ国で 36,339 名（男 20,096 名、女 16,243 名）が参加し、2,638 名が現在派遣中である（2011 年 6 月 30 日現在）。応募者は全国から様々な職種を持つ人が集まるが、近年特に多いのはスポーツ部門や教育部門への応募である。国立および公立学校の教員には現職に就いたまま参加できる現職教員特別参加制度も 2001 年度には創設され、派遣形態も多様化してきた。募集は年に二回、春と秋に行われ、職種ごとに書類選考や面接、語学試験などが実施される。

選考によって協力隊員に選ばれた人たちはまず派遣前に事前の研修と語学訓練などを経ながら実際の任地へ向かう。協力隊員たちは現地の政府機関や NPO/NGO などの公益機関の一職員として主に活動する。活動や職種はその地の要請に合わせて多岐にわたるが、活動の形態は以下の四つに大別できる。①村落の一員として、農業技術等の指導・普及活動を行う村落型、②職業訓練校や中・高等学校で教科指導を行う教室型、③土木作業などの現場工事や病院、工場に勤務する現場勤務型、④本庁や研究機関に所属し設計や研究を行なう本庁・試験場型である⁷。発足後初めて派遣された第一陣はフィリピン、ラオス、マレー

⁶ NPO 法人 CFF ホームページ <http://www.cffjapan.org/about/about.php#> より引用 (2011 年 12 月 27 日参照)

⁷ 金子洋三「青年海外協力隊」内海編前掲書 p.83

シア、カンボジアの四カ国へ計 26 名だったが、5 年後には 10 カ国 200 人余りを派遣するまでになり、また帰国後の隊員たちが協力隊事務局職員として採用されたことも相まって一気に協力隊事業は推進された。1980 年ごろには帰国後の隊員たちによる協力隊 OB 会も全国に組織されるようになり、協力隊事業は国内でも浸透していくようになる。

高橋真央は青年海外協力隊へのインタビューを通して、隊員たちの意識の変化を「共通性」「共時性」「共感」という三つのキーワードでまとめた。隊員たちはそれぞれの活動中に現地の人々との共通点を見出し、時間を共有し、感情を共有する。そして「共通性」「共時性」を通して彼らと「共感」することによって、自分と相手の間での相互依存という「つながり」を意識する。現地の人々とのつながりを築くことによって隊員たちは、現地が抱えている問題からやがて日本や世界との関係や世界規模の課題へと結びつけていくようになる。青年海外協力隊事業はこのようにして隊員たちに現地の人々とのつながりを得る機会と同時に課題に対して取り組む機会も与えているのだという。高橋は青年海外協力隊について、以下のようにまとめている。「ひとりの市民がボランティアとして手を挙げ、開発途上国に出かけていく機会が青年海外協力隊である。青年海外協力隊は、一人の人間から波及する様々な影響力にかけた事業であるともいえるだろう。そこに市民参加による青年海外協力隊の可能性が秘められていると考える⁸。」

ODA としての一事業である青年海外協力隊では、その派遣対象は日本国籍を有するものだけである。しかし多文化化・多民族化が進んでいる日本社会においては日本国内の人材が多様化しているのが現状であり、カナダで取り組まれている「架け橋ボランティア」（家族の母国で行うボランティア活動を支援する制度）のように派遣対象を多様化することも今後は必要となってくるであろうと中村安秀は指摘している⁹。これに対して JICA は、青年海外協力隊事業は日本政府が行う二国間技術協力の一環であり、開発途上国政府の要請に基づき受入国の経済社会発展に協力することが目的であること、この設立趣旨は閣議決定されており応募資格として国籍条項が設けられていることを説明している。その上で日本国籍を有していない者に対しては国籍条件のない国連ボランティアや NPO/NGO 活動を通じた国際協力への参加を促している¹⁰。

日本国内の職場を休職し、そのポストを保ったまま協力隊となる現職参加制度も大きな課題の一つである。先に述べたような現職教員特別参加制度が 2001 年に導入されたとはいえ、一般職の職員を現職のまま協力隊員として派遣する「派遣条例」が制定されているのは全国の市町村のうち 6 パーセントに過ぎない。市区町村の職員は村落開発や上下水道処理などの分野で活躍が期待される人材であり、また教育の重要性に対する認識が高まっている途上国においては現職教員の派遣が熱望されている。現職のまま協力隊員に派遣され

⁸ 高橋真央「市民参加と青年海外協力隊」内海・中村編著前掲書 p.114

⁹ 中村安秀「青年海外協力隊をめぐる」内海・中村編著前掲書 p.53

¹⁰ 国際協力機構ホームページ

<http://www.jica.go.jp/volunteer/application/seinen/qa/answer.html#qb-4> より抜粋（2011 年 12 月 27 日参照）

ることへの職場等の理解も必要だが、帰国後の隊員の採用促進も協力隊事業が取り組むべき課題ではある。帰国後の隊員に対して JICA が直接就職先を紹介するようなことはないが、進路相談カウンセラーによる進路開拓支援制度は用意されている。帰国後の隊員には自分の社会に帰って来てから果たすべき役割もあるが、その点については次の章で詳述する。

3. 帰国後の活動

海外ボランティアに参加した人が帰国後に期待される役割のひとつとして、その体験を「語ること」がある。JICA 地球ひろばには途上国の実情や国際協力について、青年海外協力隊の元隊員が自身の協力隊活動体験を通して語る講座プログラムがあり、国際理解教育の一旦を担うことが期待されている。テレビやインターネットを通じて途上国の情報を容易に手に入れることができるようになった現代においては、協力隊経験者は単に自分の経験を「語る」ことだけでなく、そこからさらに一般市民の意識を高め、行動につなげていけるような道案内ガイドとしての役割が求められているという¹¹。海外ボランティアや国際協力というものを遠くに感じる人、何をしたらいいのかよく分からない人にとって、そのような道案内の存在は国際協力を身近に感じるためにはこの上ないツールであり、協力隊経験者だけでなく海外ボランティア経験者である私自身も、自分が同じ役割を担っているということを自覚している。

これまで海外ボランティアに何度か参加してきた私が常に心の中でわだかまってきた感情が、荒木徹也によって明文化されていたので以下に引用する。「どれだけ現場を見たところで、その観察された現実を改善するための具体的なアクションを起こさないことには、自分自身も世の中も変わらない。そうはいっても、(中略)制度的な問題は、その根本的な解決に着手することさえ容易なものではなく、まして一個人の努力の身による解決など望むべくもない。この種の問題に対しては、往々にして「早く忘れてしまいたい」という人間の本音の部分、いわば深層心理が作用するため、現場から帰国してしばらくすると、そうした問題が存在することさえ忘れ去られてしまう¹²。」どれだけ個人が現状を変えたいと願い、世界を変えようと志したところで、実際に直面する問題はあまりにも大きく複雑で、個人の努力のみでは解決が不可能である。だからこそ、まずはその問題を細分化し、個人レベルでも解決可能な課題にするためにも「現場で記録する」というファーストアクションを起こすことの重要性を荒木は指摘している。ボランティアとは活動の性質上どうしても対症療法的になりがちなものである。砂漠に木を植える植林活動も、路上で暮らす子どもたちに教育を施すことも、貧困地域に学校を建設することも、地球温暖化や貧困といった、その背景に横たわる大きな問題を抜本的に直接解決する手段にはなっていない。ボラ

¹¹ 中村安秀「青年海外協力隊をめぐって」内海・中村編著前掲書 p.55

¹² 荒木徹也「初めてのフィールドワーク」荒木徹也・井上真編『フィールドワークからの国際協力』昭和堂、2009年 p.33

ンティア活動は現実社会に存在する困難を少しでも軽減するための行動であり、構造的な問題をなくすことは非常に難しい。自分の意識が変わっただけでは、世界は変わらない。自己啓発だけでは世界にとっては何の意味もないのである。海外ボランティアに参加する人は、必ずしも武器を持った専門家ばかりではない。むしろ、何も持たない自分に歯がゆさを感じて現場に飛び出していく人も多い。自分に何ができるのかは分からない、けどじっとしていられないからとにかく自分の目で世界を確かめてみたい——そのような思いを持って海外ボランティアに参加する人ほど、自分の無力さを知ってかえって大きく傷ついたりもする。問題意識を強く持っている人ほど、先進国が発展途上国に対して抱く逃れられない罪の意識、原罪とさえいえるような後ろめたさを感じるものである。けれど海外ボランティアはいわば種まきの状態なのであり、この時点で成果や答えを求めるようなものではない。その罪の意識を忘れずに、しかし決してそこで立ち止まってしまわないこと。そこで感じたことを今後はどうつなげていくか、活かしていくかということが重要なのだ。海外ボランティアとは今すぐに直接なにかの問題を解決するような行動ではない。それは、人を育て、人をつくる一つのプロセスであるといえる。

「海外でボランティアに参加するために高いお金を払うのなら、その金を寄付してもっと直接的に役立てた方がいいのではないか」という疑問を投げかけられたことがあるというのは前述したとおりである。ボランティアに参加するためのお金をそのまま寄付に回す、この行動こそが実はさっさとこの罪の意識から目を背け、現実の問題から逃げてしまう一つの手段になってしまう危険性がある。もちろん NPO/NGO が活動していくためには資金が必要で、寄付によってその資金を賄っている部分は小さくないので寄付という行動そのものを批判しているわけではもちろんない。また時間的・体力的その他要因によって自分で直接行動を起こすことが難しく、他者の行為を支えるために寄付という手段をとる人もいるだろう。それも一つの国際協力の形である。しかし、一度寄付してしまうことで満足してしまう人もなかにはいるのでないか。一回の寄付で「国際協力」の責務を果たしたような気分になり、寄付した後のことは我関せずで、その資金がどこでどうなっていくと興味ないという姿勢には多少の問題があると言わざるを得ない。そこまであからさまではなくとも、寄付という行為はとてもシンプルに問題解決に役立てる可能性があるため、「寄付はするから後は任せた、どう使おうと勝手だからその行動の責任もこちらにはない」とでも言うような無責任さも付きまわるように自分には感じられるのである。だから私はあえて、同じ金を寄付に回すのであれば、自分でボランティアに参加してみたいと考えるのである。もちろんこの二つは対立するような性質のものでもなくて、ボランティアに参加した自分がさらに寄付をすることだって可能なのである。アプローチの方法が、自分で行動するか寄付という形をとるかで違うというだけのことなのだ。

ここでボランティアの「手段化」という問題が立ちあがってくる。たとえばスタディツアーなどは、何か形に残るものを現地に築くわけでもなく、いわば「問題意識の種まき」であるとはすでに述べたとおりである。ワークキャンプも同じ側面を持っており、例えば

現地に学校の校舎を建設したとして形に残せるものはあくまでも貢献活動の一端、実際はキャンプに参加することそのものに意義があり、そこから参加者や現地の人びとがどう変化するかということの方が重要であると私は考えている。しかしそこから現地滞在中、キャンプ参加中の体験よりむしろ帰国後の活動の方がより重要であると仮定してしまうことは現地の人びとをないがしろにしてしまう危険性もはらんでいる。なぜならば私たちが海外に行つて目にするものはまぎれもない現実、私たちが帰国してから安全な暮らしを取り戻しても現地で続いていく日常なのであり、そこに生きる人びとは決して私たちのために用意された見世物ではないからである。海外ボランティアの参加者が帰国後に、現地滞在中に得た何らかのものを次につなげていくことは、乱暴な言い方をすれば現地の人びとを次のステップへと繋がる踏み台にしたということである。現地滞在中の体験をあまりに容易に「次へとつなげていくきっかけの場」にすることは、今もなおそこで暮らしている人びとを道具として、海外ボランティアを一つの手段として貶めてしまう危険性があることを努々忘れてはならない。帰国後だけではなくキャンプの参加中もそのような意識を持って現地の人々と接しなければ、時に日本人と現地の人々との間に亀裂を生むことにもなりかねない。普段日本人と接する機会のない現地の人などは特に、一個人としての「私」を日本人の代表として見てしまうこともあるためである。同じように、日本人参加者たちが出会う現地の人ひとりを取り上げて途上国を一般化することもできず、ただまぎれもないひとつのリアリティとしてその出会いを受け止めなければならないのである。

4. NPO/NGO が海外ボランティアを派遣する意義

これまでは個人が海外ボランティアに参加することの意味を考えてきたが、続いて本章ではNPO/NGO が海外ボランティアを派遣する意義について考えていきたい。NPO/NGO がなぜ人びとを発展途上国に送るのか、なぜ一事業として海外ボランティアを行なっているのかはすでに触れた部分もあるが、ここではNPO/NGO の事業としての海外ボランティアの意義について考える。まず海外ボランティアの派遣主体となるのは大きく分けて宗教的慈善団体、政府機関、国際機関、非政府機関（民間団体）の四つである¹³。規模が大きい分さまざまな面で制約なども増えてくる国際機関に対し、より草の根レベルでの小回りがきく非政府機関の担う役割と可能性は大きい。有田ゆり子はNPO/NGO の強みを簡潔に「現場とオフィスとの距離をフィールドワークによって縮められること、事業決定までにかかる時間が速いこと」と述べているが¹⁴、やはりNPO/NGO の最たる役割が自分たちの足で現場へ赴き、そこにあるニーズを把握し、迅速に行動し、直接の役に立つことである。ただし活動主体が草の根レベルのNPO/NGO だけでは資金面や人員面など、さまざまな限界に突き当たることになる。時には視点をマイクロからマクロへと切り替えることも必要で、全体を俯

¹³ 池田光穂「国際ボランティアと学び」内海・中村編著前掲書 p.34

¹⁴ 有田ゆり子「国際協力におけるNGOと研究者の役割」荒木・井上編前掲書 p.176

瞰し調整する役割も欠かせない。そのためにはより大きな主体である政府機関や大規模な国際機関の力が求められ、NPO/NGO と政府機関が相互に効果をもたらしながら連携し協働することが今後は重要になっていくのである。

また、政府機関は一国を背負う立場上、他国への干渉はどうしても外交という側面が避けられず、積極的に他国と関わることは時に「介入」になってしまう。国家の枠に縛られずに自由に声を上げることができるのが NPO/NGO の特徴であり、また NPO/NGO が存在していることこそが、国家が果たすべき公正な社会秩序の実現を求める抗議の声であると定松栄一は NPO/NGO の存在意義を主張した¹⁵。NPO/NGO はあくまで国際機関や政府機関を補完するような組織ではなく、それそのものがもはや重要な一つのアクターである。内海は ODA の内容の拡大に伴う NPO/NGO との連携の重要性を説いている¹⁶。ODA は社会開発分野を対象を広げることによってそれまでの経済分野だけでなく平和構築などの新しい分野も国際協力の一部として行なうようになり、また緊急支援から復興支援、開発支援へと時間的にも広がりを見せ、さらに新しい分野だけでなく新しい地域や国も支援の対象となっているというのがその拡大の理由である。時間的にも地理的にも拡大した国際協力の課題の多様化によって、国際機関や NPO/NGO と ODA との連携は必然的なことであり、以後も拡大を続けていくことは疑いようがない。

伊勢崎賢治は「開発」を「制度」と「システム」への積極的な介入によって広範囲な人口の生活を向上させることであるとし、このようなマネジメントを日本のボランティアを求めるのは間違いであるとした。日本が高い金をかけてボランティアをわざわざ派遣することは現地の人材を侮辱することであり、日本の独りよがりな傲慢な善意の押し付けであるとまで批判している。ただし問題なのはボランティア個人ではなく制度や政府であること、ボランティアを派遣する主体は文部科学省の管轄下に置くべきだとするのが伊勢崎の主張である¹⁷。

ここでコーテンが分類した、NPO/NGO の発展モデルと役割変化を見てみたい。まず第一世代の NPO/NGO は戦争などの緊急時に人道的援助を行い、基本的ニーズを満たすために活動を行っていた。これは最低限のモノが不足している人々を一時的に救済するための活動であった。第二世代の NPO/NGO は、地域社会の後進性を問題意識に掲げ、例えば貧困地域に直接食料をもたらすのではなく効果的な食糧生産の技術を身につけさせるなど、コミュニティの人々が自立的に行動し問題解決にあたるような、コミュニティ開発が行なわれた。つまり NPO/NGO の役割が直接の福祉活動ではなく外側からの支援に移ったということである。第三世代の NPO/NGO はより大きな、地域や国家レベルの政策や制度の変革を目指す。国内を飛び出し国外の NPO/NGO と連携するようになり、資源の分配の偏りや制度上の制約を正す指導的役割を担うことになる。そして第四世代の NPO/NGO になると、これまでの開

¹⁵ 定松栄一『開発援助か社会運動か』コモンズ、2002年 p.243

¹⁶ 内海成治「国際協力とは何か」内海編前掲書 p.26

¹⁷ 伊勢崎賢治『NGO とは何か——現場からの声』藤原書店、1997年 p.49

発概念からついには地球規模の課題に対する社会運動を目指すようになる。マイクロレベルの活動を行った第二世代やマクロレベルに活動した第三世代を経て、第四世代では地球規模の課題を解決する民衆運動として広がってきており、「宇宙船地球号」というテーマが叫ばれるように、グローバルな視点が持たれるようになってきた。今現在の NPO/NGO の方向性はといえば、まさにコーテンの分類するこの第四世代にあたるといえるだろう¹⁸。

コーテンの分類を踏まえた上で、久保田賢一はさらに次の NPO/NGO 活動の方向性を三つ挙げた。一つめが、新しい社会へのビジョンの提示と地球市民教育の充実である。コーテンが第四世代として掲げた人間中心の開発を地球規模で行なっていくためには、新しい「平和で持続可能な地球市民社会」を建設するビジョンが必要である。また地球の構造的な問題を知り、異なる社会に生きる人々が互いを理解し協力関係を作っていくためにも、学校教育における「総合的な学習の時間」の活用など積極的に地球市民教育に踏み込んでいくことが大切である。二つ目が、ボランティアの拡大と専門性の確保である。スタディツアーやワークキャンプなども一つめの地球市民教育に含まれるが、このような活動に多くのボランティアを受け入れることで NPO/NGO 団体に対する理解者は増えていく。その情熱や熱意を支え活動を息の長いものにするためにも、専門性の確保が次のキーワードとなる。NPO/NGO を運営していくこと、外部に対して説明責任を果たすこと、活動資金を確保すること、政府や自治体と交渉することなど、さまざまな専門性が求められる。専門性を持つ人材を確保し NPO/NGO を成長させることによって活動の幅も広がる。ただしもちろん拡大化にともなって当初の理念がおざなりになったり NPO/NGO 本来の持ち味である小回りが利かなくなってしまうようなことは注意すべき点である。最後の三つ目が、ICT(情報通信技術)の活用とグローバル・ネットワーキングである。これまでマスコミが中心に存在していた情報はインターネット普及により一気にアクセスが容易なものとなり、インターネットというメディアを活用することで NPO/NGO 活動は一気に幅を広げることとなった。また国際協力 NPO/NGO をはじめとして地球規模の問題に取り組む NPO/NGO の再編成が行われ、小さな NPO/NGO も声を上げることができると同時により大きな NPO/NGO 団体も組織されるようになった。インターネットを活用することで地球規模のネットワーク構築が可能になり、北と南の人びとを民衆レベルで結びつけ、パートナーとして共に行動していく土台をつくりあげていくことができる時代になったのである¹⁹。

私はすでに述べたように、大学二年の夏に NPO 法人 ACTION の主催するスタディツアーに参加してフィリピンを訪れたことで国際協力の分野に強く関心を持つようになった。それから半年後には NPO 法人 CFF の企画するマレーシアスタディツアーに参加し、大学三年の夏には再び ACTION のプログラムでフィリピンにおけるワークキャンプに参加した。それで私自身が変わったのかと聞かれれば、変わった部分もたくさんあるし、変わらなかった部分ももちろんある。一度目と二度目の参加では見え方が変わったこともあれば、回を重ね

¹⁸ 久保田賢一「NGO の役割と動向」内海編前掲書 p.139

¹⁹ 同上、p.145

るごとに新たに見えてきたものもあった。一度目には確信していたことが二度目に揺るがされたり、抱いた疑問を解くために参加したキャンプでさらなる迷路にはまってしまったりと、とにかく参加したすべてのプログラムが私にとっては今でも非常に大きな意味を持っている。むしろ、毎回異なる感情を抱き、いまだもってその迷路から抜け出せないからこそ私は海外ボランティアに参加し続けてきたともいえる。しかし私が海外ボランティアに参加していること、帰国後も NPO/NGO の一員として活動し続けていることそのものが直接の社会貢献、国際協力につながっているかといえば、いまだ自分に対して無力を感じ続けている私には素直に頷くことはできない。けれどだからといって、自分のこれまでしてきたことが世界にとって何の意味も持たないとは思わない。ここに野田直人の例えを挙げたい。ある貧困地域にある女性を家政婦として雇った場合、彼女の収入は間違いなく上がる。この視点を少しずつミクロからマクロの方向にずらしていくとどうなるか。この女性の世帯の収入には明らかな変化が現れる。彼女の住む町にも、多少の影響は反映されるかもしれない。しかし市、州、国と見ていけばどうだろうか。区切りを大きくしていけば、その変化はもはやほとんど現れなくなってしまう²⁰。だからといって、この女性の収入の変化を「なかったもの」としてしまってもいいのだろうか？マクロの視点でばかり見ていると、ミクロの変化は最初からなかったものにされてしまうことがある。私が一人の個人としていくら変化したところで、世界に直接影響を与える力を持つわけではない。だからといって、私自身の意識の変化には意味がなかったということではできないのである。だから私も、今の自分に何もできないからといって嘆いてばかりではいけないのだ。今私が自分に対して無力を感じることはきっと未来の自分につながっていくし、何もできないこととそれまでの行動が意味のないことはイコールではない。

一般的に日本での NPO/NGO 活動というと素人によるボランティア活動がイメージされるだろうが、例えばアフリカなどにおける NPO/NGO 活動はより専門的な集団としてとらえられることが多い。高度な技術を持った専門家の集団が NPO/NGO であり、それぞれの NPO/NGO が得意分野を提供しあって連携し支援を行っていく。しかしあくまで日本人の私が日本の NPO/NGO の一員として行動する際に求められるのは高度な技術や専門性ではなく、まずは最初に述べたようなボランティアの気持ちであろう。素人集団では何の問題もすぐに解決することはできないかもしれないが、そもそも私達が直面しているのは明確にゴールのあるような問題ではなく、終わりのないプロセスの一部に過ぎない。誰それさんの収入がいくら上がれば目標達成、砂漠地帯に何本の木を植えれば温暖化を食い止められる、そうではなくて、絶えず変化し流動し続ける世界の中では明確な敵もいなければ絶対的なゴールも解決方法もないこと、そのことを忘れずに意識し続けることこそが重要なのだ。かといっていきなり世界の裏側にいる誰かのリアリティを自分のものとするのは難しいから、その想像の一助として海外ボランティアは存在しているのではないだろうか。意識し続けること、これは簡単なようでいてとても難しいことである。人は終わりや答えのない問題

²⁰ 野田直人『開発フィールドワーカー』築地書館、2000年 p.12

から目を背けたくなるものだし、迷っている時ほど単純明快な解に心地よさを覚える。圧倒的な現実を忘れたらという心理が働くのは当然のことだ。それでも自分が目にしたものを忘れずに居続けること、その裏付けのリアリティと重みを海外ボランティアの経験は与えてくれる。

海外ボランティアの参加者は、一般的にみて大学生が圧倒的に大部分を占めている。体力的にも金銭的にも時間的にも余裕のある若者が外の世界に目を向けたとき、海外ボランティアというのは外の世界に繋がる一つの道であろう。この熱意ある一人の若者を、専門性がないから海外ボランティアに行くことは意味がない、と切り捨ててしまうことはできない。この一人の熱意が次の時代を担って形づくっていくのであるし、その育成こそが NPO/NGO が抱えている一つの役割でもある。何の力も持たない一人の青年が海外ボランティアに参加し、何かを考え、その意識の変化を次の行動につなげていく機会を与え、次代の担い手を育てることが海外ボランティアを主催する NPO/NGO の果たすべき責任である。また海外ボランティアに参加することによって、同じような問題意識を持っていたり、同じ関心を持っている人びとと多く出会うことができる。逆に今までの人生では出会えなかったような、全く異なる価値観を持つ人びと同士をも海外ボランティアは結び付けてくれる。異なる価値観を持つもの同士が出会い、数日間の浸食をともにし、同じ現実を目にすることも小さくない意味がある。私自身もこれまでの三回にわたるキャンプ参加で一緒に過ごしてきた人たちや帰国後に NPO/NGO の活動を通して知り合った人たちは数え切れず、キャンプで得られたかけがえのないものの一つである。同じ問題に対して目を向けている人びとがいることは一人では実現不可能なことを可能にし、やがて集まったパワーは世界を動かしていく力にもなり得る。海外ボランティアは、そして NPO/NGO はそうしたパワーを秘めた若者たちが集まり、互いに出会う場でもある。

5. おわりに

何事であれ、物事は単純な二極化はできないし、また二極化しようとすることは危険でもある。国際協力の分野などにおいては理論か現場か、という論争を目にすることもあるか、そもそもこれらはどちらが欠けても成り立たないものだ。現場を見ていけばもっと知識を身につけようと感じるだろうし、理論ばかり詰めていっても現場が見えなければ話にならない。フィールドワークを大事にしていると、理論よりも現場の方が重要であると思いがちである。現場をまず見てみないことには始まらないのだと。本当は現場に直接出なくても学ぶことはたくさんあるのに関わらず、である。しかし私たちは自分たちで積み重ねてきた時間、歴史の中で生きている以上、ある一定の価値観に基づいて思考することはもはや避けられないことである。そうであるならば、せめてそのことに対して自覚的になり、絶えず自身に向かって疑問を発する姿勢が必要である。人は何かの問題に対して明確な答えを求めがちである。迷っている時にはなおさら、誰が見ても納得できる

ような明快な解を与えて欲しいと願う。けれど問題自体が存在せず、形を持たないままに常に変化していくものであれば、そこに答えを求めようとする事自体が間違っている。

「世界」を考えれば考えるほどに、その根本に横たわる構造や変えられないものの大きさに気づき、戸惑い、無力を感じる。しかし変えられない構造があるのであれば、構造そのものに挑むだけが手段ではなく、そこで諦めてしまうのでもなく、構造の中であがいてやる、という姿勢も必要である。変えられない構造の内側から、その枠を自覚し、工夫することで変えられるものも確かにある。途上国と先進国は、構造のあちら側とこちら側にいるのではない。ともに、同じ構造のなかに生きているのだ。世界との繋がりを絶えず意識しつつもまずは自分の根ざしている社会から地道に一つずつ行動を起こす。Think local, act global という言葉もあるようにこの視点を養うための一つの手段として、海外ボランティアは役立つのではないかというのが私の今の結論である。

海外ボランティアとは、参加することそれだけに意味がある行動ではない。海外ボランティアに参加して何を見て、何を感じ、何を考えたのか自分に問いかけ続けること。世界のどこかで怒っている現実を自分自身で体験し、そこで生きている、同じ地球上の同じ構造のなかで生きている人々と出会うこと。自分が参加した NPO/NGO 団体がどのような理念を持っていて、どのような役割で活動しているのか知ること。そして一人の個人として、あるいはどこかに所属する構成員として、社会の一員として、地球上の一人の人間として、自分に何ができるのかを問い続け、探し続けること。一つの答えに出会っても絶えず疑問を抱き続け、変化していく姿勢を持つこと。これらのきっかけとなり、土台を作ってくれるものこそが、海外ボランティアである。海外ボランティアとは世界の人々と出会うための扉であり、また次の扉を開いていくための鍵ともなるのである。